

## 巴金の作品世界 『火』について

中 村 俊 也

### 序

文学におけるテーマ設定に大きな背景が用いられることが有る。戦争はその大きな典型である。巴金（1904- ）の『火』は、三部から成る大作であり、一部は、1940 年昆明に成り、そこには 1932 年 1 月 28 日の「上海事変」、1937 年 7 月 7 日の日中戦争勃発から同年 8 月 13 日の上海への波及時期が描かれ、二部は 1941 年に成り、内地における抗日戦地区の遊撃戦、かつ三部は 1943 年に重慶に成り、昆明を中心とした後方地区における抗日宣伝活動を描く。作者は、『火』は「失敗作である」と述べている<sup>1</sup>。そしてそれを支持する艾曉明氏の論文も存する<sup>2</sup>。最近は「反省思考」の潮流の中、地道な読み直しも行われている<sup>3</sup>。では、『火』は本当に失敗作か、驚異の長期活動を有する作家の描いた全くの謙辞ではないのか、そのような形跡はどこに存するのか、検討する必要が有ろう。また、『火』再考の關鍵はどこに存するのか。比較文学上での

<sup>1</sup> 本論文は基本資料として香港の南国出版社の印行本を用いる。第一、第二、第三部のそれぞれの「后記」に執筆事情が印される。各年次、場所もあるが、全体印行年次は記されていない。

<sup>2</sup> 艾曉明著『青年巴金及其文学视界』1989 年四川文芸出版社発行の中、「從激昂的戰歌到沈重的挽歌—『火』三部曲得失漫議—」（本文 261 頁～274 頁）参照。氏の見解として「作家が創作途上、思想芸術の質量において下降の状況が生じている。一つは、人民に背き、現実の背き、もともとの思想水準から後退し、跌落したこと、これは芸術生命が衰朽し始めたのである、二つは、新しい方面から人民に近づき、現実の近づき、もともとの創作の道筋、表現の方法ではしばらくはまだ新しい現実を反映した必要に適應できなかった、このくい違いが一つの＜下り坂＞の現象となって現われた。しかし、後にこのような状況の下、しばらくの＜下り坂＞が往々にして新しい芸術の高峰に邁進する過程となるのだ。」（本文 262 頁）が示されている。むろん、失敗作について単に批判するだけでなく、この時期を飛躍のチャンスと捉える。

<sup>3</sup> 陳思和、周立民選編『解読巴金』2002 年春風出版社刊行、の中、許子東の『《火》：抗戰三部曲』（本文 233 頁～239 頁）の結びには巴金の次のような言葉を引用し、彼を弁護する。「後に海外の人が巴金の作品の本文修改について批判を示した、巴金自身はそれらを気にせず、次のような考え方を堅持している。『改めるのは決してよくなくはない、改めてそれが情理に適うのであるのなら、なぜなら私の考えはいつも変化しているからだ……作品は学生の答案のように提出した以上改められないというものではない』と。

可能性はどこに見い出されるべきか、逐一見てゆくこととする。

巴金の文学は世界性を備えている。『火』は彼自身が抗日戦に身を処した姿勢——「アンガージュマン」に在り、傍観者的、モラトリアムの、ディレッタント的な行き方と異なる傾向を有する点は、何人も認めざるを得まい。また、多くの国際的利害の衝突する中国において、さまざまな方向からの政治、経済、社会、文化への関わり方が始終追及されてきたことはむしろ当然である。

たとえば、フアヂエーエフの『壊滅』が、日本軍に包囲、猛迫されるロシア革命軍の孤立の恐怖を語り、それが全体を通じての背景になっている。日ソ軍衝突時の強大なソ連戦車隊の威力を、伊藤桂一の『静かなノモンハン』は描き、ドイツ軍の猛攻の場面をショーロホフ、「大祖国戦争」経験者は再構成し、襲来する艦爆機の波状攻撃を、吉田満の『戦艦大和ノ最期』は漢文書き下し調で表し、2001年の米国映画、『パールハーバー』は日本軍機動部隊の執拗な壊滅的攻撃を再現しようとする<sup>4</sup>。

戦争文学の共通性は、此方の側が彼方の側の脅威、時としてその不可効力性までを描くところに存する。『火』もこの特性を有する。

さて、『火』は国際都市上海を包む劫火を描く。1932年8月13日以来の日本軍の攻撃を受ける、いわゆる「上海事変」を背景に展開する。『火』は戦火の色に即した称喟である。

「空が曇っている、人の心に暗雲が垂れ、焰が天空に真つ黒な山影を画き出していた、山の形は変化しており、その形は拡大している。北方の一角は、煙霧に覆われている。空は明らかに低くなり、大気は息詰まるように変わり、天は墜ちて来そうになり、人の頭上にのしかかっているようである。夜にはなっていない、しかし夜の色はすでに上海のどの一角をも包んでいた。」(『火』一部 九章 97頁1行～5行)

巴金は、風景を遠方からゆっくりと、上海の街を鳥瞰する。そして、戦火の渦中に在る都市の動きを注意深く写してゆく。

「すり切れた衣服の子供と大人が、夕刊を小脇に抱えせわしくわめきながら大通りを駆けて行った。人々は争って新聞を買い、それを手にして、歩きながら眼にし首を振ってため息をつく。人々は押し合いへし合いしながら、そそく

<sup>4</sup> フアヂエーエフ原作 蔵原惟人訳『壊滅』1960年岩波書店の本文並びに「解説」参照、伊藤桂一『静かなノモンハン』1983年講談社の本文と解説、ショーロホフ原作 昇曙夢訳『祖国のために』1965年角川書店の本文と解説、吉田満『戦艦大和ノ最後』1994年講談社の本文と解説それぞれ参照。

さと道を歩く、通りで立ち止まり、常態を失したようにさまざまな声を発する。自動車、路面電車が、広い紅木馬路（ホンムウマールウ）の上で塞がれている。交通整理の中国人巡査は、外国人巡査の助力を得て懸命に道路の混雑を捌いている、手を振り、笛を吹き、慌ただしく赤と緑のランプを点滅させている。しかし、北に向かう人々は潮のようにフランス租界から湧き上がって来る、いましがた一群を送り出したかとみるまに、別の一群が今度も十字路のところで押し合いへし合いする。笛の音を待つだけで、人々の群れは水のように前に向かって流れていった。足音と話し声が岸を打つ波濤のように濃い煙の出る方向に突っ込んでゆく。」（一部 九章 97 頁 6 行～15 行）

今日ではだれでも想像できる混雑が丁寧に描き出され、しかも、それは全体として動いている。澁みがない都市生活を捉えている。

「人の流れは抵抗すべからざる力を以て火災の生じている場所に突っ込んでゆく、だが、それは一つの橋の畔（へり）のところで遮られた。が、後退しようとしなない人の流れは、その近くに停まっている。人々は遠くから向こう岸の有様を見ている。鉄条網を越えたそこは、静かなビルと殺風景な市街である、それらが幾重にも重なった建物のうしろには、高低の不揃いな屋根が見える、そこから大きな黒煙が勢いよく出て、つむじ風のように天に向かって伸びている。煙はますます濃く、数個の煙の固まりが互いに接近して、あつと言う間に大きな固まりになって巻き上がる。下の方には紅い火がピカピカと黒煙を推し動かし、スピードを早めて剰りの灰白の空に向かって勢力を拡げてゆく。」

（一部 九章 97 頁 16 行～98 頁 5 行）

この部分だけ取り上げれば、人々の物見高さを刺激する不幸な火事とのみ受けとめられかねない。巴金の地上の核心的場面を際立たせるための用意である。

「とぎれとぎれに銃声が響いて来ては、静まってゆく、それは人の心に憎しみや恨み、そして悲しみや憤りをのこす。誰もが河のこちら側から向こう岸の火を眺めている、そしてこう思うのだ、あちらにはどのくらい私達の同胞が居て、どのくらい私達の家が有るのだろう、と。年配の人はため息をつきながら首をかしげる。彼らは思う、これは宿命だ、逃げ切れない運命だ、と。若者は唇を噛みしめ、拳（こぶし）を握り、眼を真っ赤にして人知れず罵る、焼くがいい、僕たちの失われるものすべては、ぜんぶ君たちに償ってもらおうぞ、と。」

（一部 九章 98 頁 6 行～12 行）

巴金の文章は静から動への徐やかでありながら、次第に盛り上がる激昂へと読者を導く。それは具体的に登場人物の口で語られ一層の臨場感を帯びる。

「劉波（リュウ・ポー）は怒りを含みそれが体に行き渡るのを覚えた。彼は向こう岸をこれ以上見られない、ただ単に小さな火であってもそれは彼の体を戦慄させ、血を沸き立たせた。彼は眼前のすべてが本当のこととは思えないし、暴力が正義に勝つとは思えない。だが、火焰がそうした信念を覆い尽くす。黒焰が眼の前に拡がろうとしている。黒い焰の中で立ちすくむ大人や小供、男と女、皆空を見上げ涙を流している、苦痛のために歪んでしまった口からは、絶えず途切れることのない叫びや哭きながらの訴えが沸いて出るようだ。

『私の家が…私の肉親が…。』と。彼らも自分と同じ人間のはずだ。はじめはあのような不幸せな同胞、次は自分の番だ。彼もこの受難の民族の仲間だ、彼もあの人達の運命を引き受けるべきなのだ。この時、彼は侵略者の得意の笑い声が聴こえるような気がした、色情狂の獰猛な笑いを見たような気がした。多くの暴行事件がすぐに彼の脳裏に浮上した。……、『焼かせてしまえ、中国人は焼き尽くせないぞ。』と劉波は我に返って憤って言う。『そうだ、これは始まりに過ぎない、勝敗は分らないぞ。』と（友人）の鳴盛（ミン・シヨン）はきっぱりとした調子で答えた。」（一部 九章 98 頁 13 行～99 頁 7 行）

「火」は上海を焦す戦火でもあり、中国の人々の内に沸き上がってくる抵抗力の激しさであり、それも火に例えられる可能性がある。戦争文学とは、巨大な此方を圧倒する力を見、戦慄する此方の動きを率直に認め先方を打ち倒す可能性を信じ、引きもきらぬ戦闘を継げる、こうしたことについて省力をせずに描き切ってゆく、こうした特徴を有していると言えよう。巴金が『火』を長篇として持ちこたえた必然性の一つはここに在る。

## 1. 倥幸の脱出

一部の背景は、1931 年 9 月 28 日の十五年戦争（＝鶴見俊輔氏の呼称）開始から 1940 年 9 月 27 日ベルリンにおける日独伊盟締結前までである。この間、中国で国共合作が成立し、ソヴィエトの援助の下抗日戦を行うこととなる、1940 年 3 月には、南京に日本との「善隣友好、共同防共、経済提携」を求めた汪精衛（1884 ～ 1944）の政権が生ずる。『火』を読む場合、考慮にいれるべきことはむろんこれに止まらないが、それらは論述の途中で示すこととしよう。

主人公の馮文淑（フォン・ウエンシュー）、朱素貞（ジュー・スウジェン）は戦傷者を収容している病院の見習い看護婦、むろん志願者である。戦争は次々と絶え間なく死傷者を造り出す、従ってこの病院の機能は綴むときがない、戦争文学の中でまず取り上げらるべき理由がそこにある。二人は手術後に苦痛

で泣きわめく患者を看護婦が静かに眠らせようとする現場に立ち会う。かろうじて小康を得た患者の求めに応じて抗戦歌をうたう。抗戦雑誌を作成している劉波は文淑の以前からの顔見知り、劇作家の曾明遠（ツオン・ミンユアン）は、一部、一、二章で登場する文化人。劉波は背後に要人襲撃を執行しようとする同志を有しているが、文淑や素貞と次第に戦火の最中に交情を深めていく青年である。曾明遠の主要舞台は二部で、戦地工作用のリーダーとして、農民のバルチザン活動育成を目的として十二人の仲間と一緒に演劇を行う。病院長と友人の曾明遠は売国奴（＝原文は「漢奸」）が紛れ込んで画作しようとするので、病院を見舞う慰問団に注意するよう上部から命令されている。南京政権指導下の中国人の日本への投機分子に用心せよ、と言う。

主人公の文淑は、父親の友人が親日的な影響力を持つという事情に在り、家に帰るのが嫌でたまらない。思い切って前線に出たいと願う彼女、友人の劉波は、既に敗北主義者（＝つまりは漢奸）の頭目を壊滅させようという、鄭永言（ジョン・ヨンイエン）や鳴盛（ミン・シヨン）の地下組織の虚無党的活動に参加している。彼らは虎視眈々と機会を狙っている。巴金は壊滅を二つの意味に使い分ける。一つは、強大な対敵を消滅させるという意味で、もう一つは自らの戦闘意識、ひいては人々の拠り所が消滅する、という意味である。前者は、アナーキスト的巴金の『滅亡』以来持ち続けた傾向である。

第一部の全体構成、締め括りをまとめよう。

巴金は『火』という舞台に次々と特色有る人物を登場させ、役割を担わせる。文淑、素貞という二人の女学生は十代から二十代へと登場する。戦争が長期化すれば無数の若い世代の力が必要とされ、犠牲者も増大するわけで、こうした見習い看護婦の女学生をまず登場させるのは理屈に適っている。

文淑のボーイフレンド劉波は、抗戦活動の一つとして中国人、上海の人々に雑誌を配布し、反日を訴えている。文淑の働く病院に訪れる慰問団長は、曾明遠で、彼は戦地工作団長でもある。同僚の素貞は、のちに日本軍の空襲の大火を前にして民衆の渦の中に巻き込まれ、文淑と離ればなれになった時、劉波と深く愛し合うようになる。曾明遠の下で働いている周欣（ジョウ・シン）は、文淑と親交を深め、家に彼女を招く。劉波は抗戦出版を手がけているだけでなく、広い人脈を有する。第一部に登場する鄭永言、鳴盛、老九（ラオ・ジュウ）、子成（ヅウ・チョン）等の活動者の狙う人物は「漢奸」の頭目らしい。『壊滅』というフアジェーエフ（1901－1956）の書物の標題を中心思想に構成される本作品は、日本軍の強大な軍事力の発動、その暴力におののく中国民衆を描出

するとともに、反動として双方向的に、日本軍の破壊力と表裏する「漢奸」の中核に向けての襲撃を徐々に極立たせる。そして、『火』の第一部の標的となって犠牲に供されるのは、抗战出版物のガリ版刷りのカッティングに眼を凝らし精力を傾ける子成である。彼は、劉波が自分たちの仕事を理解しつつも、素貞との愛を燃え上がらせている最中であり、同行者として執心できない弱点を有することを知り尽くしている。永言、鳴盛の燃え旺る対敵活動に従って、彼は決意を固めている。そんな男達のスタンスの取り方は締め括りで実態を露わす。

「壊滅」（＝原文「摧毁」）という言葉は、『火』全篇を包むテーマである。中国人の希望を葬り去る劫火である。救国団の劉波、戦地工作団の李南星（リイー・ナンシン）の兩人に向かってくる黒煙はこうした強大な日本軍の破壊力である。

「これは一つの象徴である、暗黒が彼等に向かって押し潰そうとしている。暗黒の勢力が広がっている。暗黒は彼等の執心するところ、熱愛するところの全てを壊滅しつつある。憤恨は泄れ出る場所も無く、全て心の内に積もって苦痛となる。彼等は心身の全てが苦痛に占められるように感じた。彼等の脇を通り過ぎる人が居る、話しつつ、ため息を吐きつつ、悲憤と絶望の表情をして。しかし、二人はそんな周囲の全てに注意しようもない。彼等はまったく分からないが二人は決して孤立していない。こうした時にも、まだ二、三百万人の人々が彼等の苦痛を分け合っている。彼等は黙って黒煙を眺めている、物を言うのもつらかった。」（一部 十四章 148 頁 12 行～19 行）

徐々に、しかし確実に迫って来る圧力、その核心的力は何か。それは、各所の記述をみれば推し量り得る。中国人の抵抗に迫る脅威、それは漢奸の影響力の大きいさではないのか。

こちらを「壊滅する」対敵を逆にこちらから「壊滅する」方途とは何か。

「会議は終わろうとしている。人々は帰る準備をする。いかめしい空気がすぐに笑い声で破られる。老九が得意気に言う。『明日、あいつはもう吠えられなくなるぞ。お祝いのプレゼントにこれ以上のものはない。』

皆は満足して一斉に笑い出す。光韓（グワン・ハン）は既にドアの外に出ようとしている、こちらに向き直ってたしなめるように言う、『いくら用心しているとはいえ、呑気にしすぎではいけないぞ。』

『そんなこと言うのはよせ、向こうは明日この関門を逃げ切れないぞ。』

老九は自信っぽりに答える。」

凶手の事前の心境を巴金は喰い入るように写す。

「子成は片隅に立って声を立てない、彼は沈んだ顔をし眼を各所に光らせている、吸いつくように建物の中の人と物を注目している、明日、彼はことによると全てとお別れになるかもしれない、明日はきっと別のところで眠ることになるだろう。これ以上、今までのようにここで静かに謄写印刷の仕事をすることは彼にとって不可能となろう。彼とあの〈敗北主義者〉は同一の世界に存在し得ないのだ。あいつは罪惡の代表だ、きつと〈あいつ〉を壊滅しなければならない。彼が一人を壊滅させれば、とりもなおさず一つの制度を壊滅させることになる。……、そんなことを考えている。」（一部 十章 109 頁 1 行～ 14 行）『火』に込められた意味は、こうした活動者の復讐の熱でもあり、とりもなおさず燃え上がる火である。

子成の方途とは、こうである。

「唯一の方法は多くの苦痛に満ちた思い出を洗い出すことであり、全ての昔の記録を消すことである。彼はこの決断に何等の疑念ももはや有しなかった。」そして「罪惡を破壊し、自分を犠牲にする」こと、（一部 十章 109 頁 15 行～ 17 行）なのである。

地下工作者は複数で、「敗北主義」者の領袖を狙撃しようとする。

女学生、そのボーイフレンドとの交情を日常生活の典型として示しつつも、巴金は読者の眼をこれら地下工作者、朝鮮人を含む実行隊に向けさせる。それは、もはや、『滅亡』の単一的決行者から連带的、協同的攻撃である。それは巴金の見聞に含まれる抗日戦の様相を反映したものであり、軍閥優勢の専制王朝的支配の中枢に向けられる前代的急襲とは異なっている。しかし、巴金はロシア的アナーキストの相貌を有するリアリストになりきれない人物を、「子成」として描く。

実行の時がきた。彼等はどう動き、どのような結果を得るか。第一部の最大の山場である。子成は、沈着に場面の動きを凝視するしかない。そのうち頭目の永言から指示が出る、最終局面での平静な領導で永言の何人たるかが判然とする。

「子成は横の通りに入った。通りを横切ると真新しいヘリンボーンのコートに身を包んだ男が向こうからやって来る。永言だ、眼が少し動いた。

『来たか。』子成は興奮して尋ねる。永言はあっさり言う。『僕じゃない、（行くのは）君だ。劉波の合図に気をつけたまえ。間違えないように。』永言はこともなげに悠々と去った。」（一部 十七章 172 頁 6 行～ 10 行）

子成の狙う人物を過不足なく、華美に流れず地味に隠し切ってしまうのでも

なく、巴金の筆致は冴える。焦点がそこに絞られている。

「子成は前方に十分に見知った顔をちょっと見る。彼等の一人、買収されたばかりの同郷人がガイドの女性を連れて得意気に歩道に出てきた。子成はびっくりして慌てて顔を伏せる。その人物は脇の女性と話しに夢中で、彼のほうに注意しなかった。彼は正面のタバコ屋の方を見る。劉波の顔はもうそこになかった。だが、あの＜敗北主義者＞が旅館に入るのを待って、子成もやや目立たない場所に足場を定めてから、その場所を見る、劉波の顔が今度はタバコ屋の前に現れた、鳴盛の顔もそのあたりにちらついていた。」（一部 十七章 172 頁 19 行～173 頁 3 行）

事は始まるが、巴金が執心する子成に計画の全体は見えない。しかし決着は早く来る。

「少し経った、近くの自動車の音が大きくなる。滞っていた空気がかき乱された。子成は本能的に振り返る、誰も出て来ない。彼は慌てて今度は劉波の方に眼を向ける、劉波の帽子が突如脱がれる。彼はすぐに上を向いてゆったりとした足取りで歩いてゆく。右手は緊くポケットの例の物を握りしめながら。彼がちょうど旅館の門の前に着いたときだった。銃声が予想外に響いた。続けて三発の音がした。彼はびっくりして一歩後退さりする、顔にはすぐに失望の表情が現れた。」（一部 十七章 173 頁 11 行～17 行）

混乱の中で子成は情況を整理し、次の行動に移る。明らかに衆目に曝されただろう劉波の行方が気になる様子である。

「近くで大きな異変が生じたらしい。人々は気が狂ったように走りつつわめいている。クラクションの音がけたたましく鳴る、自動車が定められたのとは別のところへ逃げてゆく、こうした音の混じりあう中、急にやや長い口笛が響いた。子成には永言が仕事を終えて逃げようとしていることがわかった。劉波の影もどこへ消えたかわからない。彼らが合図を送って子成に逃げるように言っている、彼は安心して一息ついた。ここに居る必要はない、何も知らぬ様子で静かに大通りを歩いてゆく。」（一部 十七章 173 頁 18 行～24 行）

子成は逃げ切れたはずである。しかし、彼には気に懸かることが生じた。割り切ろうとしないこだわりが存することになる。

「通りは混乱していた、不意に幾人かの声がする。『あの男だ。あいつだ。』一人の巡査が誰かを追いかけている、後ろから五、六歩隔ててもう一人の巡査が走っている、途中で笛が鳴る。子成は我に返った。彼には追われているのが誰かは見えない、だが、分かることと言えばその男が警吏の網を逃れるのは難



しい、ということだった。こう考えると彼は戦慄を覚えた。彼の考えは素早く行動に移され、ただちにその方向に動いた。」(一部 十七章 174 頁 1 行～7 行)

子成のここからの動きは仲間の急場を見逃せない、という彼の奥深いところから出た義侠心ととれないこともあるまい、しかし、それは子成の性情と不可分の行為である。

「子成の方でも追いかけて行く、口で犯人を捕えろ、とわめきながら。誰もそんな彼にかまおうとしない。彼は巡査がちょうど角を曲がろうとした時、急いでピストルを引き抜き、巡査の広い背中めがけて一発射った。その大きな体はすぐに倒れた。一秒も措かずに続いて二人目の巡査に向けて発射する、弾は射たれたがすでに遅かった、彼は二人目の巡査を倒すことはできなかった、二発の弾丸がほとんど同時に背後から子成の体に打ち込まれた。彼の体はふらついた、前方から飛んできた三発目の弾が子成を地面に倒した。体は地面に着いた、ピストルは彼の手を離れた。彼はまだ立ち上がろうとしてもがいているようだった、しかし、もう一発の弾で彼は静かになった。」(一部 十七章 174 頁 8 行～16 行)

巴金の描く狙撃犯は器用ではない。しかし、それだからこそ対象により迫切する可能性を有しているのかもしれない。子成の最期を見取る巴金の筆は入念に彼の姿勢に触れる。

「子成の体は血溜りの中に在る、近視の眼は堅く閉じられ、見知らぬ人の視線に答え得ない。しかし、彼はとうとう鉄筆用の板(ガリ版)から離れた、彼の望みを果たし、永遠の安らぎを得た。」(一部 十七章 174 頁 17 行～19 行)

巴金の種明かしの表現は、闘争の最中僥倖に生を得た者のみ持つ反省を示し、今後の彼の行路を示す。苛烈な戦争の渦をくぐりぬけられるのは通常こうした者だけである、と確述する如くに。醒めた観察を垣間見せる。

「追いかけていた男は劉波であった、彼はこうしたことの経験を有しなかった、この天地にはなんと古めかしい不思議な心情が存するのだ、彼は旅館の前で合図役をし、永言(＝狙撃犯の頭目)の仕事を目の当たりにして、思いもよらず凶手と間違えられた。しかし、結局は予想しない銃声の中で安全に逃走できた。」(一部 十七章 174 頁 20 行～23 行)

## 2. 普通人の惜別

第二部は戦地工作団をめくり展開する。中国本土が戦地となっているという矛盾は、だれもが背負う負担と考えるのがごく普通であろうが、「占領区」においては宥和工作が進んで、焦点がぼかされ、敵味方の区分が不明確化となる、中国人による親日工作が進むその中で、彼我の区別を人々に認識してもらうべく漢奸を追撃し、日本軍の禍害を断罪する宣伝活動が進められてゆく。

しかし、緊張の続くなか、若い仲間、集団のなかでは恋愛をめぐる話題も出て一見平和時の学生のためのサマーキャンプかと思まがわれる場面も現れる。動中の静というべき情景だ。

主人公も、自分に対して一方的に好意を抱く普通の青年をうっとおしく思っているが、親友は青年の真剣さを認め、話題に出してからかう。しかし、主人公は全く無関心で問題としない。まるで地上の民の些細なことは与かり知らぬ天上の女神の如く…。やがて、局面がくる。

『火』の第二部は、1941年5月23日に重慶で書き上げられた。1941年12月8日ハワイ真珠湾で勃発した、米海軍に対する日本軍機動部隊の波状攻撃前のことである。中国本土において苛烈なパルチザン戦が続けられていた。遊撃戦の最中その一翼を担う戦地工作団の12名構成の宣伝隊は、中国軍に従い、村落で演劇活動、教宣活動に明け暮れる。

一見、物見遊山と思われる情景が出現するのも戦争文学の特徴である。四六時中絶え間のない従軍など有り得ないはずであり、静動のこうした交織のなかに実際の戦争は展開してゆく。だから第一幕は朝のけだるい起床の場面から始まる。

「『私もうすぐ来るってば、もうすぐ来るってば。』

部屋中のいびきの中からすすり泣く女性の声が洩れ出てくる、それは部屋の中であちこちに突き当たり走ったりして、まるで艱苦の中で逃げ道を探しているように、<銃眼>の中から飛び出してゆこうとしている。だれも阻むことなく、その声はそのまま遠ざかっていった。部屋の中は相変わらず一面息詰まる悶えである。いびきの音は続けて溜ってゆく。その間には怖ろしい歯ぎしりの声が響く。しかし、人の気持ちを掻き乱す臭気は、なんと増え続けている。

そのうち、「わあっ」と声を出して一人が泣いた。その女性の声ははっきりしたものではない。部屋の隅では白い腕が布団をまくりあげ、二、三度それを上に揮い動かす。突然、真黒い髪をまとめてある頭が持ち上がり、白い下着姿の若い女性の元気な体が起き上がる、彼女は一方の手で布団をつかみ、もう一

方の手でゆっくりと眼をこする。」(二部 一章 180 頁 1 行～13 行)

青春の物憂い目覚めは、戦場の朝といえども変わりはない。文淑の友人、周欣は絵が上手い。彼女の眼は中国の景物を捉えてゆく。

「左側は一重一重と重なる山、一重ごとに高くなり、最も高く遠い山の峰は、まるできらめく淡青<sup>うすあお</sup>いテントの上に貼りついているように雲と一緒にひしめき合っている。黄色い山から灰色の山まで、その山の峰とよく似た灰色の雲まで動くと、この少女の眼は瞬間に往復してすぐ動く。雲は移り、色を変えてゆき、薄暗いものは明るくなり、濃かったのも淡くなった。山も輪郭だけが動かず、一面の金メッキがその上に施され始める。」(二部 一章 183 頁 1 行～6 行)

中国の山野、大陸の姿が大きく捉えられる。それは、主人公の親友周欣の絵筆の下に展開する。巴金の作品の中にある不思議な静けさとのみ言い切れない、現代風の表現を用いれば、癒しの働きは、大景を丁寧なゆがせにせず画用紙に繰り展げる水彩画の世界でもあり、一筆一筆のタッチに人は見入り、彩色が夢を誘うのではないか。しかし、戦場は暫しの休息を許さない。

軍隊の行軍は果てしなく続く、終りのないように。山々を虫のように這う道と軍隊。

「皆は食事代を払い小屋を出た。前方に草緑色の軍服を着た兵士が波濤のように湧いてくる。この進軍はまるで終りの時がないようだ。番号を見ると何番の軍隊が通り過ぎたかがわかる。しかし、新しい兵がさらに大きな集団になって正面から山の尾根を上って来る。相変わらずきちんとした歩幅で、同じ表情で、相変わらず若い黒ずんだ顔で、炎熱をものともせず、疲労も顧みず、しかも危険を恐れずに、勇敢に前線に向かってゆく。」(二部 十四章 375 頁 8 行～13 行)

巴金が第二部において描く犠牲者は、王東(ワン・ドン)である。野外に遠足に来たように、仲間の女性とりわけ主人公の文淑に興味を示し、不器用につきまとっていた「詩人」が、行軍の最中に標的となる。天の無作為的選別を読者に印象づけるように。巴金の筆はリアルになる。

「飛行機の音が突然天空から生じ始めた。誰がまず音を聞きつけて知らせたのかわからないが、一瞬のうちに道全体がざわめいた。草緑色はすぐに水のように散らばった、行く手の両側に流れてゆく。危険を逃れる者は、すくみ、慌てて勝手に各所に駆け、掃射を遮ることのできる場所を探す。文淑、周欣など数名はたまたま小屋の脇へ逃げ中に隠れる、そして頭を斜めにして見上げる。

王東と方天行（ファン・ティエンシン）はもうここをそそくさと後退して、また戻って来て皆と一緒に隠れる。方天行の表情は落ち着いている。王東は真っ白な顔をしてうずくまり、身を丸く縮める。（二部 十四章 375 頁 14 行～21 行） 危急の時にとるべき行動とは何か。一面視界の開けた大地で人々は応急の場を選ばねばならない。巴金の文章は長篇だからといって理屈をさし挿んで冗長になることはない。事の推移を急迫してゆく。

「あたりは急に静まり返る。飛行機の音が次第に接近して来る。

『あそこだ、三機来る』呉平（ウー・ピン）が低く叫んでいる、文淑が首を伸ばしてその方向を見た、三機、爆撃機が羽を拡げてこちらに飛んで来る、頭上に来ようとしているようだ。

『動くな、敵機が頭の上を旋回しているぞ。』曾明遠は厳しく声を殺して命じる。飛行機の音が徐々に大きくなって来る。道は死んだように静かだ。兵士たちは息をひそめて地面に伏せた。

『ここは駄目だ、標的になっている。』王東は怖じ気づいて言う。

『話しをするな。』曾明遠はいかめしくささげる。この時、敵の飛行機は頭上を回り始めた、その音ははっきりとしている。小屋の中の人は地面に平らになりうずくまった。王東が突如立ち上がり狂ったように小屋を出てゆく。

『出るな。』方天行が声を低くして叫ぶ。

彼は王東について出る、王東を小屋に引き戻そうというのだ。小屋の中は静まり返っている、皆は引きつった眼で外を見つめる、外で誰かが王東を責め罵っている、だが、王東の声がしないし、二人は戻って来ない。飛行機が突然恐ろしい急降下音を立てて小屋の上に飛んできた。小屋の中の人は、文淑も中に居たが押し黙って地面に伏せた。」

人々の喧騒がひしひしと伝わってくると同時に、災厄にじっと動かず守りの姿勢に追い込まれる静寂、この二つが切実に映えて戦争文学の特色が発揮されている。体験と証言を俟ってこの臨場感が構成されたに相違ない。

「この瞬間、爆弾が落ちた。ひとしきり耳のそばでシュウシュウという音、爆撃の音、人々は哀しみの声をあげた……地面はどよめく。ほこりが空を遮る。暗闇と風砂、小屋が崩れるように押し下がってくる。山が倒壊したと思われた。皆は縮み上がって誰しもが我が身の生命に少しの望みも持とうとしない。同じ音が立て続けに三度響いた。その後今度はガッガッという機銃の音。それからはずっかり静かになり、息苦しい静寂となった。ほこりがゆっくりと地面に戻り、すっきりとした空が現れた。敵機はモーター音とともにゆっくりと遠くへ

去った。」(二部 十四章 375 頁 23 行～376 頁 24 行)

一時の恐怖は去り大地に人々の元気が蘇る。軍隊は行軍を続ける。まるで何事もなかったかのように、戦場では回復力がよりものを言う。(しかし、「壊滅」の跡は生々しく残る。)

「草緑色の軍隊は次々と進んでゆく。元通り、きちんとした歩幅と若い顔、表情はどれも大体同じでそこには何等の恐怖も存しない。彼らは依然として勇敢に、潮が湧くように前へと進軍してゆく。」(二部 十四章 377 頁 5 行～7 行)

戦争とは絶えざる更新であり、再生である、個としてのものではなく、全体としての、全一としてののである。個々の不幸は素早く忘却され、そこから次の行動に移れるものが生れ変わった現実の中に処してゆく。しかし、文学は故人を忘れないし、個の不幸が持つ意味を印象づけて停まない。禍害はごく普通の詩人風の平凡な若者に爪を立てた。置き去りにされた犠牲者を巴金は忘却しない。中国人の持つ非忘却性が発揮される箇所である。故人にそれとなく好意を持たれていたからか、全く無頓着だった娘がまず声をあげ皆の注意を呼び醒ます。五感の優位がそうする如く。

『王東！』文淑が急にびっくりして叫んだ。彼女は、口元を血でぬらし、痩せた顔をびくびく動かしつつ苦しい呻き声を出している人を見て、それが王東の顔であることに気づいた、彼のやや光沢のある髪が額(ひたい)にはりついている。慌てて走り寄る。他の仲間も駆けて来た。曾明遠が真っ白な顔をして怖気づいて叫んだ。『方天行君は！方天行君！』

返事がない。」(二部 十四章 377 頁 12 行～16 行)

普通の若者の死こそ戦争の日常である。英雄譚はそこにはなく、目の前の仲間の惨禍への献身が克明に描かれる。それは接写され一層迫力を示す。巴金のスタイルだ。

「仲間達は何も言わぬまま王東の前に立っている、そこには下半分の顔と一本の手を残した屍(しかばね)が横たわっていた。王東の全身は血まみれで衣服はボロボロ、腹の皮は裂け、腸なども全部外に爆裂していた。皆は唇(くちびる)を咬み、紙のように白くなった顔をみつめた。知らぬまに涙が滴る。文淑はひざまづき傷口を包帯で結わえようとする。すると彼が少しもがいた、口は開き、血の流れるまま言う、『馮君、ありがとう、近寄るな、汚れるから。僕はお終いだ。』

『王さん、大丈夫よ。話をしないで。』

文淑は耐えられず泣きながら励ます。彼女は腹の上の形体を成さなくなったものを見たが、どうしていいかわからない。涙の眼を仲間の張利英（ジャン・リィーン）に向けて頼む。

『ガーゼよ。ガーゼを早く。』

『私が取ってくるわ。』周欣はすぐ走り出した。（二部 十四章 377 頁 12 行～378 頁 6 行）

表現全体を見るに、巴金は抗戦文学の思想の締め括りに注意する。普通の青年、王東はささやかな「責任」を果たす。死に臨んで自己の死の意味づけをし、仲間への配慮を忘れない青年として最後まで死力を尽くす。

「王東は懸命に眼を動かし、幾人もの仲間を見つつ確認するかのように頷いて言った。

『二十五年か、さよなら。……手紙で僕のこと家に知らせてください。……、悲しまないでください。すべては抗戦のために尽力したことですから、……後悔しません、……』言葉がもうはつきりしなくなろうとしている。もう一言、『曾团长は…方天行君は…、みんなは、まだ、…』と尋ねる。（二部 十四章 378 頁 7 行～11 行）

巴金の筆は続き、死の何であるかを客観的に読者に知らせようとする。平凡な青年の死は、一人一人の動作の終り、静寂の始まりであることを教える。総じて巴金の世界に流れる静けさがここに在る。

「彼はここまで言うのと喉から痰を含んだ声を生じた、血がドクドクと溢れてきた、そのあとの言葉はゼイゼイという喉の音に変わってしまった、彼は夢中でもがいている、何かを言おうとしているようだ、しかし口を開いても流れ出るのは血だけで声にならない。彼のまなじりから大粒の涙が二つ、三つ流れ出た。もう一度動くと、すぐに眼を閉じた。仲間が曾明遠团长が今どこにいるかを教えたが、王東にはもう聞こえなかった。

『お姉さん（＝年上の親友、周欣を指して言う）、もう駄目、どうしよう。』文淑は泣いている。（二部 十四章 378 頁 12 行～19 行）

巴金は付言しないが、一同を救ったのは、王東、方天行、就中、王東の死であることはこの場合明白である。掃射の的が絞られ成果を得て飛行機は引き揚げたのだ。これから誰が狙われるか分らないが、しかし、標的になったのは工作团长リーダーの曾明遠でもなく、演劇の中で中国人に罪行を働く日本軍人をピストルで倒す役を演じたヒロイン文淑でもなければ、また、戦場の景物を写し上手に宣伝文を書いていた周欣でもなく、台本作りの李南星でもなかつ

た。フアヂエーエフの『壊滅』も日本軍の銃撃で仲間一人を犠牲に供するが、巴金の作品『火』第二部は、詩人風と噂される平凡な若者達を描出している。戦争は決して英雄譚として語ってはならない、平凡人の死を描くのだ、という巴金の責任感が示されているようだ。

抗戦というテーマに即して考えれば、巴金においていかなる形式、方向が作品の中に示されているのか。『火』に見えるのは、『滅亡』の扱う要人襲撃は踏襲されている。(＝作中人物－永言、鳴盛、子成、劉波ら拳銃による直接行動は成功したが、子成の犠牲のもと生きながらえた劉波が恋人の素貞に宛てた手紙には、これからはもう永言、鳴盛の方式は歩まない、と表明している) 二部で、遊撃隊の農村巡回宣伝活動の中に男女の交情ものぞかせているところは、この部分の成立した 1942 年 5 月 23 日の段階でもフアヂエーエフの『壊滅』の影響と考えられる。二部の「戦地工作団」12 名の内地戦闘地区における宣伝活動の展開が描かれる、即ち、1937 年の日中本格戦争からは、「虚無党」的要人襲撃の方式からソヴィエトの草創期におけるボルシェヴィキーと同様、有志の集団で日本軍に対決する方式に転化したと考えられる。『火』の思想を見るには、一部、二部、三部を通じて転生を遂げてゆく文淑、周欣に注目しつつ、本篇に新しく付け加えられている様相の中心部分を見逃さず読み進めることとする。

「工作団」の友人、李南星から文淑に宛てた手紙がこの新しい展開を示唆する。

「……お世話になったお礼に本を送ります、記念としてください。魯迅先生自身が翻訳、ゲラ刷りの点検もして発行した小説です。書名は『壊滅』ですが、ここには新しい人物が登場しているのです。私は数年このかたこれを手離したことがありませんでした。どこへ行くにも身につけていたのです。これが相当私を元気づけてくれました。ぜひ読んでください。何かの時に自分を振り返る場合には少しづつ役立つでしょう。自分を改造する時に。作者はソヴィエトの優秀な小説家です。つつしんで民族解放のために。同志諸君によろしく。」

(二部 十二章 336 頁 20 行～337 頁 5 行)

ここでは、『火』の中心思想が「フアヂエーエフ→魯迅→巴金」の方向で、作中人物、「李南星→文淑」の譲渡に引き継がれ表れる。そして中国現代文学が現代ロシア文学と不可分に結びついていることがここから読み取れる。

二部の結末部には、日本軍の機銃掃射によって仲間を死傷させられたのち、

文淑が李南星に宛てた返信には、やはり、『壊滅』のことが語られる<sup>5</sup>。

「……最後になります報告します。送ってくださった例の書物、私は以前上海で読みました、しかし、よく分かりませんでした。昨日慌ただしく一通り読んで確かに良い本だと思いました。いつも身につけてあなたのお勧めのように、何回も、細かく読んでみます。このような状況の中でこの本を読みますと、特別に役に立ちます。つつしんで民族解放のために。」(二部 十五章 9行～12行)

二部を支えるのが、フアヂエーエフの『壊滅』であることがわかる。

### 3. 選ばれし生け贄

第三部は、初老の牧師の抗戦活動と主人公やその友人達との交流、何よりも牧師が私財をなげうってエネルギーを注ぐ出版活動と息子を空襲で失う悲劇、そしてそれがもとで衰弱し終焉を迎える経緯が、ヒロイン、友人の証言を介在させて進む。

牧師はエホバを信じ、信念を持って人生を切り拓いた自助努力の安定の人である。そして、それはロバート・オーエン(1771～1858)流の社会思想を有し、ロシアの改革者ゲルツェン(1812～1870)の理想に共鳴する立脚点に拠っていることで一層磐石である。そして漢奸への対処の仕方にも自信を有している、世事に通じている面も有する人物である。

しかし、日本軍の空襲の前に、予想外に彼の愛すべき血を分けた息子を失う。それまでの快活は影を潜め、健康は失われてゆく。

戦争下の知識人の典型として、こうした人物を登場させる巴金の必然性はどこに在ろうか。

二部と三部の間には大きな転換が有る。巴金は劇場仕立ての舞台設定、場面展開が得意だ。読者はまずもって新しい場面に入っていく前に、大音響、自然の力、雷鳴により気分を一新させられる。それは、『火』の全篇に登場する空襲警報や砲撃、機銃掃射の不気味な人為のしわざとは違い、造化の威力であり、乾いた大地に注ぐ慈雨をもたらす恵みと取れる天の声である。人はこうした中

<sup>5</sup> 他の場所に馮文淑が渡された書物を喜んで見ること、そこには四人のソ連の遊撃隊員の画像が印刷して載っており、魯迅訳、三関書屋校印と有る、と語り、李南星が内山書店で魯迅先生に会った、ということに言及している。(二部 二章 338 頁 11 行～18 行) なお『魯迅全集』第七巻 1958 年人民文学出版社(北京)に『壊滅』(＝原文＜毀滅＞)の紹介が有り、販売店として「上海北四川路底内山書店」と示している。



で戦時といえども、包まれ休息できるのではないか。

「青灰色の空に突然閃光がひらめく、あたかも刃物で天幕を切り裂いたように。続いて雷鳴が響きわたった、ひっそりと眠っている家屋はかすかに震動する。そしてまた、あたりは静まり返ってゆく。

次の閃光が開いている窓から部屋の中に射し込み、中を雪のように白く照らし出す。外向きのベッドの前に古い靴と新しい黄色い皮のハイヒールが並んでいる。」(三部 一章 386 頁 1 行～6 行)

三部を論じる前に、その後の人々の消息に言及しなければならない。

戦地工作団に入り、前線に行っていた馮文淑は、上海に戻り仲間を尋ねる。リーダーの一人だった李南星は、依然被占領区で遊撃隊を率いて敵と戦闘を続けている。曾明遠は軍隊に従い戦地を走り回り政治活動をしている、という。(三部 一章 393 頁 12 行～18 行)

文淑のたどりついたのは、後方地区の昆明であり、そこで素貞と再び一緒になる。素貞は北京大学、清華大学、南開大学が戦火を避難し、ここに開いた西南連合大学の学生となっている。文淑は李南星から貰った大切な書物フアヂエーエフ著、魯迅訳の『壊滅』を敵の爆撃を受けて失った。(同上 24 行に依る) 文淑はこれから何に心の支えを求めるべきか。勉強家の彼女にそのような文化資源が培われていようか。第一部、二部を通じて熱意有る文淑の友人周欣も病没していた。

第三部の主人公は 53 歳の「老人」、田恵世(テイエン・ホウエイシー)である。敬虔なキリスト教の信者で、厳格な父の下に育ち相当の苦労を重ねた人である。彼には「やんちゃ息子」がいる、ということだが、その実態は何か。巴金はここで読者に謎を与え、そのまま人々を作品世界に引き込もうとする。田恵世は文淑、素貞と盛んに心を通い合う。

「素貞は小声で文淑に教える。『ねえ、田先生のやんちゃ息子って知ってるの。あの人、例の刊行物のことを言ってるのよ。』『へえ、面白いわ。』

文淑が笑う。彼女はもう真白い石の坂道を歩み始めた、何かずいぶん清々しい気分を覚えた、青い空が三人の頭上に在る、文淑は親しげに田恵世の表情をうかがう。月の光が彼の笑顔を照らした、そこには安らぎと悦びが示される、口を少し開き、口髭あご髭にはいく粒かの露滴のようなものがくっついている。彼女は今度はこう尋ねる、『田先生、あなたのおっしゃり方からしますと、きっとそのやんちゃ息子のことをとても好きなんでしょう。違いますの。』

田恵世はひたすら満足そうに笑いながら、ややあつてはじめて言う。『これは

ずいぶん人をひどい目に合わせる子供でね、だから私は好きなんですよ。』

(三部 二章 408 頁 21 行～ 409 頁 6 行)

三部の中の焦点である「やんちゃ息子」は田恵世が丹精して作りあげつつある雑誌のことである。素貞が心配する、恋人—劉波の居る上海に迫る危機についても、彼は澁みなくすらすらと答えてゆく、抗日戦の全ての局面を見通すような自信に溢れている。

『田先生、上海のニュースご存知ですか。』素貞は小声で尋ねる。文淑は突然の質問にびっくりしたが彼女を心配して見ている。

『少し知っているよ。フランスが降伏してから上海の状況はますます悪くなっている、予想できないことが多い、思いきって言えば、あそこは人の住む世界じゃないよ。』田恵世は笑うのを止めて答える。

『素貞のお尋ねしたいのは、劉波たちは大丈夫だろうかということなんです。田先生、お分かりでしょうか。』文淑は慌ててすぐに言う。

『あの人、三ヶ月以上手紙を寄こさないんです、危ないめに遭っているのじゃないかしら。』素貞は声を低めてつけくわえる、この時彼女の眼はしっかりと田恵世の茶色に輝く口元の髭を見守って答えを待っている。『分かっている、大丈夫と思う。』彼は答えた。そして少し経ってから、また一言つけ加える。『上海で活動している人は、決して少なくない、彼らは日本人をどう相手にするか、漢奸をどう相手にするかを知っている。』

『田先生、劉波に会ったんですか。』文淑が尋ねる。

『以前、二、三度ね、さっぱりした人だ。』田恵世はこう答える。『そういえば私は今度、香港であの人のことを話しているのを耳にしてね。』『何をです。』素貞は両眼を輝かせる。

『日本人が彼に注目しているそうだと、劉波は何度も漢奸から釘を刺されたが、少しも怖がっていないらしい。』田恵世は昂ぶって言う。

『それじゃ大丈夫じゃないですわ。』素貞は顔色を変え、声をやや震わせていぶかる。

『大丈夫と思う。彼らは一緒に活動している人が相当いるし…』田恵世は少しも動揺せず明るく言う。『私も以前、上海から何度か奇妙な電話を受けた。こちらは少しも意に介していない。その結果、こうして私は無事にしてきたんじゃないかね。』ここまで言うと、彼は今度はさっぱりと笑い出した。

(三部 二章 412 頁 22 行～ 413 頁 23 行)

第三部の文章表現、描写が目立つ箇所はどこだろう。そもそも巴金は、他の

文人と同じように局面を揭示する前に、必ず伏線を張る。各章に均等に伏線を張るところ、局面を揭示するところはむろんそれぞれ存するのだが、大きな山場を表すとすれば、ここしかあるまい。

巴金は、主人公の語りの中ですでにこうした伏線を、のちに起こる事件のために用意する。周到な配慮というしかあるまい。

「(友人素貞の質問に答えて、) 文淑は懐かしむような調子で言う。『こういう時代、一人二人死ぬのは普通のことね。ただ、抗戦のために犠牲になるのが意味の有ることなのよ。』素貞は窓の外を眺め、ひとりごとのように言う。『でも私、知り合いの人が死んだという報告を聞きたいと思わないわ。今年の初め、周欣が病気で死んだという手紙を手にしたけれど、何か月もふさぎこんでしまったわ。』文淑は眉をしかめつつ語る。『実はこうもしたい、ああはしたくないだなんて全部絵空事だわ、死ぬ時になってもまだ眼は閉じないし…。私、あの都市の広州(グワンジョウ)でのことを思い出すのよ。あと半時間違えば私粉々になっていた。あの時は少しも怖くなかったけれどあとで思い出してみると驚くもの。』素貞は窓の格子にかかる紙のカーテンを無造作に巻き上げる。」(三部 一章 394 頁 2 行～11 行)

文淑の胸には、(第二部の) 王東の死が深く刻み込まれていた。このような人に深い印象を与える死を彼女はまた迎えることになる。空襲である。しかし、広州のときとは違った。(以下は第三部、十四、十五章の文章を用いて述べる。) 彼女達が心底から好感を抱いている田恵世の血を分けた息子、田世清(ティエン・シーチン) が同級生と共に死亡する。田恵世は平静を失い混乱する。そして彼は遂に神に対する怨嗟に似た告白をする。子供の顔はすっかり削げて無いために、犠牲の地に近い世清の通う学校の校長は、棺に遺体を収め、父親の駆けつけるのを待っていたのだ。文淑たちはしばらく慰めようもない。

葬礼の日、しめやかに営まれる儀式の最中、文淑は、枯れ木に懸かっている干からびた人肉を見つけ驚愕する。しかし、それは田恵世に気づかれなかった。戦闘の体験者、傷痕軍人であり、出版活動の協助をしている洪大文(ホン・ダーウエン) により、肉片は取り外され、その地に埋められた。

このことが有つてのち、安定していた敬虔な信徒は眼に見えて衰弱してゆく。結核を患い、病状が悪化し終焉を迎える。

彼が最後まで執心するのは、『北辰』の発刊である。心血を注いだ対象はかろうじて田恵世を支える。何と、彼は何度も手伝いたいと申し出る息子の要請を断っていたのだ。「やんちゃ息子」の『北辰』は最後まで心を悩ませるが、

遂に最愛の子息に代わり得なかった。

強い信念の人も、遂に普通の人としての悲しみに暮れ衰弱する。戦争の前に人は一切を剥かれ破壊され得る。そして巴金は若い主人公たちに後事を託している。

第三部の語彙を全体として注意してみると、「壊滅」(＝原文「摧毁」)の語が認められない。たとえばフアヂエーエフの作品の中に 19 人のパルチザンを圧倒する破壊的圧力が日本軍であるとして、こうした強大な象徴的圧力が、この語彙を以って示されていない。この作品が書かれたのが、後記によれば、1943 年 10 月であり、中にフランス軍の降伏など先のことが言及されているにせよ、この時は日本軍が米軍に攻勢に立たれている時であり、世界的情報にたとえば重慶で日常接触している中国の知識人においては、相当な対日本軍の戦局について客観視する可能性を有したと推察される。従って、戦争論についても一層の思想的掘り下げが進んだと考えられる。

田恵世の人物像にかかわるキリスト者としての自信と安定、それが血を分けた息子が爆撃で生命を落とす、という極立った設定にもこうした配慮が見て取れるわけである。

『福音書』を信じ、抗戦宣伝活動に出版活動もなそうとする田恵世に対し、主人公文淑は疑義を挟む、エホバの存在を認めないなら、愛はこの世に存しない、とする田恵世。二人の立場はロシアの文人に置き換えると、文淑はキリスト教は人間の闘争を曖昧にしてきたのだ、というアルツイバーシエフ(1898～1927)の『サーニン』<sup>6</sup>の主人公を踏まえており、愛の地上における顕現は社会的相互扶助であるとする田恵世はゲルツエンの『北極星』的立場<sup>7</sup>、農村

<sup>6</sup> 『沙寧』第二十四章(本文の同書引用部分に出る)は、『鄭振鐸全集』十九卷、1998 年花山文芸出版社刊行、の本文 363 頁～369 頁に載せられている。『火』に引用するほとんどの文章と同一である。なお邦訳は、アルツイバーシエフ原著 昇曙夢訳『サーニン』上、下二冊、1950 年、青木書店発行、参照。

<sup>7</sup> 巴金は、文革以後、ゲルツエンの『過去と思索』(＝金子幸彦氏の本邦初訳に依り、＜往事と随想＞をこのように訳出)を出版する。訳者の原著に対する思い入れの深さを示している。『ある人の考え方として封建(制度)は我が国では根絶したが、実は誰でも書物の中に登場する人物の身边においても自分の意図を見つけることができる(＝回想と内省の糧である、という意)……』—巴金が 1978 年に翻訳したアレキサンダー・ゲルツエンの『過去と思索』より—(中略) 1928 年以降はじめて訪仏した巴金は、この期間もっぱらゲルツエンの墓地やニースに行き、皇帝から本国を追われ流浪の生活をしていたロシアの偉大なロマン主義の作家に深い敬意を表した。(中略) 巴金の青年時代、ゲルツエンはかつて彼に磨滅することの印象を与えた。最近まで、巴金はなおゲルツエンの『過去と思索』を翻訳することを大切な仕事とした。この訳書は 1979 年に既に出版されている。すなわち大変興味深いことに一苦難に満ちた、一身の自由を喪なった

共同体志向の理想主義を襲うと考えられる。それは巴金のアナーキズムと人道主義の二つの要素を自らの中に並存させる自身の姿が外に表出したものである。ここで不自然なのは、田恵世を追求する文淑の立場の不徹底さ、リアリティの無さである。巴金の言う彼女の「未熟」がこの辺りに在るというなら、首肯できる。

そもそも、文淑の背負わされている荷物、傷痕は、『サーニン』の主人公が気に入らぬ男に妹を妊娠させられて立腹しているもどかしさに比べると、中国民衆の怒りを体しているヒロインとして、無垢の力を保持しつつ終始完うしてきている文淑は、人生における迫切性が読者に伝わる度合いにおいて及ばないのではないか。『寒夜』が抗戦期小説として、「戦火」を遠景に配しているものの、日常の登場人物の心理の葛藤をよく示しているのは、時期を経て巴金がこうした「弱点」を乗り越えたものと認められる。

妹の「敵」に機先を制して突如鉄拳を見舞い、結局その打撃の効き目により相手を死に追い込むという「カタルシス」は、文淑からは感じられない。

「失敗作」という謙辞に些かの真実味が有るとすれば、どこか。人物設定、事柄、場面構成について見てみることにしよう。

たとえば「周欣」について、この人物の登場が一部、二部のみで、三部には彼女が病死したことがさりげなく出て、両部における極立った活躍のわりにはその死を悼む表現もほとんどない。戦場における当然の死として割り切られている。これは読者として簡単には納得できない。

劇作家「曾明遠」という文化人から紹介され物語に登場したので、作者のほうでも構成上、役割を終えたら比較的簡単に退場させられるのだという思い切りの良さがかえって不自然に思えるのではないか。周欣の葬儀を見せよ、とまでは言わぬまでも、彼女の死の始末について何人かの手紙に託する形で表現して欲しい、と切望されるのである。文淑と周欣の母との親密な会話、絵の上手なじっくりした観察者、周欣の退場は本当に呆気なくはないだろうか。ファンは寂しかろう。

さて、行文上、漢奸について論じる必要が有る。

抗日戦の複雑な様相は、中国人の造す親日活動である。抗戦の側からすれば、

---

歳月ののち過去を回想する七十五歳になった巴金の、ロシア文学に対する情熱はなお衰えていない。」(呉桑格「巴金とロシア文学」『巴金研究論集』1988年、巴金研究叢書編集委員会編) 本文 202頁

それは「漢奸」(＝売国奴)とされる。そして、これは敵対国のどの国からも生ずる根の深い蔓草のようなものである。巴金はこうした内訌の論理について、第一部の中で、文淑の父親の友人の口を借りて「漢奸」の論理を示す。

『信じられないね、中国人がどうして日本人に勝てるの。そんなの夢だね。他のことはいざ知らず、向こうは毎年数百万トンの鋼鉄を生産するんだ、私達は一体どれくらいかね。』

新聞に日本の飛行機が数機撃ち落とされた、と出ていたときも、彼は首を傾げて次のように言うのだった。

『デマだよ。どこにそんなわけが有るかい。私たちの空軍はずっと幼稚さ。』と。中国軍が<彙山碼頭>(ホエイシャンマートウ)に突撃したという記事を見た時も、憤激して言う。

『嘘だよねえ。向こうさんの東洋(トンヤン＝大日本帝国)の軍隊は全部訓練を受けた精鋭の兵隊さ。私たちの軍隊がどうしてやっつけられるかい。』

(一部 四章 47 頁 15 行～48 行)

圧倒的に強大な相手に対し、抗すべきか、抗さずして連合すべきか。抗戦の主人公文淑の論理はこうである。

『冗談じゃないわ。今度の戦争は向こうが始めたんですよ。彼らがまず発砲した、彼らが私たちを先に撃ったんですよ。私たちは中華民族の独立と生存を維持しなければなりません、だから抗戦せざるを得ないんですよ。』

文淑はたまらず(父の友人に対し)思わず口を挿んで反駁した。彼女は相変わらず顔を挙げない、この人の顔を見たくないのだ。

『これは、つまり、あなた方若い人の決まり文句ですな。……若い人はきれいごとを列べるしかできない。私たちが何を以って向こうと戦うのか考えようとしな。私たちがどうして向こうに勝てますか。イギリス、フランスでさえ向こうを恐がっているのですよ、私たちのこの小国がどうするんですか。もし方法が有るとすれば、前からこんなに多くの領土を割くはずはないのです。』……文淑の忍耐力は完全に失われた。彼女は後のことはどうなろうと構わずに、思い切って怒り反駁するのだった。

『これはまるで中国人の言葉じゃありませんわ。何なら大通りに行って皆にお話ししてごらんさいよ。』と。(一部 四章 51 頁 21 行～52 頁 13 行)

こうした「漢奸」は、中国の代表的な戦争文学、老舍(1898 - 1966)の作品『四世同堂』の中に終始登場する。そしてこうした人物に対する扱いは同巧異曲であるが、中国人同志の中に深く存在した矛盾が読み取られるとともに、

抗戦文学にとって一貫して大きなリアリティの有る問題なのである。平和時の「善隣友好」は歓迎さるべき口号であっても、戦時体制下の宥和の活動が利敵行為として断罪される。

巴金が、「失敗作」という裏には述べ尽くせない事情が有ったのではないか。「漢奸」の仕事は複雑怪奇、捉え難いのがわかるが、憎悪の対象となっているわりにはその活動の経緯が明瞭でない。これは『火』の全篇を貫く関心事となっているのであるから、もう少し言及が有っていいと考えられる。たとえば、第三部において、なぜ「世清」（＝田惠世の子）のみが狙い撃ちされたのか、他の生徒と道連れとはいえ生白い彼の表情が、大地に際立って「掃射」の的になっている背景に、抗戦の著名な活動者、田惠世の愛児がこの学校の生徒の中にいる、という情報が日本軍に伝わっていてこうした悲しい結末、「見せしめ」になったと、勘ぐればできないことではないが、それでは息子の死について、神を恨むばかりのキリスト者田惠世の口から、なんら自己に加えられた敵軍のしわざという断罪の言葉は発せられないのであるから、内証者の活動のせいにはできないわけである。

ただ、漢奸の巨魁を倒されたこと（＝第一部結末）の復讐がここに加えられていたとすれば、『火』の構成上、「首尾照応」が明確に存したことになる。巴金はしかし田惠世のヒューマニズムを絶えず描出し、一点の意地悪さもそこにつけ加えることはない。田惠世はキリスト者である、ということで論理一貫して犬儒学派の入り込む隙間のない、その上徹頭徹尾の性善説的中国のインテリとして登場しているわけである。巴金は強靱な善意の人を「壊滅」させる暴力が極立つこうした時点で、なお生き残った文淑、劉波が戦地に入っていく、という情報を読者に預けて、『火』の幕をおろす。旧世代から新世代へ、戦争が要求する交替を結末において印象づけるとともに、連合軍対枢軸軍という第二次世界大戦の枠組みの形勢の中で、退潮に入った枢軸軍の状況を知っていたろう巴金は、戦争がなお続くことを予想しつつ、事態をより客観的、総合的に把握し第三部を構成したと考えられる。

### 結語に代えて

中国の戦争文学としては『火』は出色のものである。一、二、三部を通じて登場する主人公は、二十代前半の女性で若い。戦争は若い生命を必要とする。一度開始されれば戦死者は増大し、前線からは後方へ絶えざる補充が要請される。死と生のめまぐるしい連鎖はまるで地上を這う火のように苛烈である。戦

火の中でも相変わらず賑わう市中の活況を見て首を傾げる登場人物。だが、ベルトコンベアーの綴むことのない展開と、戦争が若い人々の生命を注ぎ込むこと、更なる注ぎ込みが形態上、図式化すると、変わらないのを覚えるとき戦慄が走る思いである。

戦争の攻撃と防戦においても、始まるとどちらが先に戦端を開いたにせよ、仇讐は仇讐を生じ、若者が市街、農村の区別なく駆け回ることとなる。

一部における主人公の父親、親日派の友人、二部における農村に根づいた知識人、三部における初老のキリスト教徒、彼ら登場人物はいずれも旧来からのシステムでそれなりの地位を得、そこに立つ一家言を有する人々である。しかし、戦争の最中ともなると若者の行動に圧倒されがちである。平和時の生産活動には、いかにめまぐるしくとも多少の「活躍」の地は存しても、戦場には皆無だ。戦争と青春の不可分を一層『火』は私たちに説いている。

ファチエーエフの『壊滅』にも、また将校たちの登場する『サーニン』でも依然主導権は若者に在る。しかし、『火』においては、病院奉仕生徒の看護婦見習いが縦横に活躍する。戦場で次々と倒れ病院に担ぎ込まれる傷病兵、看護活動は止まる限界が見られない。「見習い」が「正看護婦」になる可能性があることは彼女たちの権限を高める。戦時の主役は一層若者である。

さらにこの時、巴金は原子爆弾を知らなかったはずである。戦争の「壊滅」の凄絶さを知った時、もし壮年の巴金だったら、人類のためにどんな作品を書いたろうか。



## “Huo as Represented in Ba Jin’s Works”

By: Shunya Nakamura

Ba Jin (1904 – ) is one of the most famous novelist in China. The Huo is an especially well-known piece that was composed during the age of the Anti-Japan war. It is the longest story in this collection of fiction. Nevertheless, there are very few essays, which have been written about this novel. The Huo consist of three parts. My paper will deal with the typical characteristics of each part.

The titles are as follows :

## Preface

## I . A Miraculous Escape from a Dangerous Condition

## II . The Death of an Ordinary Man

## III . A Selected Victim

Instead of a Conclusion ...

The literature on the War is bound up with many elements. It contains tragedy, suspense, thrill, terror, and thought with excellent written techniques. Ba Jin has been influenced deeply by Russian writers. This novel is particularly important as it is a means for us to understand Ba Jin. In my paper I will pay close attention to the sentence structure and discuss the characteristic features of the novel. I will discuss the impact of the War on present-day society.